

女子学生のアルバイトが生活時間に及ぼす影響

吉岡 朋子, 風間 健

(武庫川女子大学生活環境学部生活情報学科)

1. 緒言

生活時間は、生活行動を研究する際の一手段として有効である。本研究の目的は、女子大学生のアルバイトに伴う生活時間の変化を知ることにある。

生活時間は、NHK 放送文化研究所が実施している国民生活時間調査が著名である。これは5年ごとに発刊され、もっとも新しいものは1995年版である¹⁾。ただしこの最新版は、それ以前の版と調査方式が変わり、それ以前の調査結果と直接比較はできない。本研究はこの最新版により検討項目を定め、それに基づいて女子大学生の生活行動を調査し、解析する。

2. 研究方法

2. 1. 検討項目の決定

上記の調査報告¹⁾は、29の行動項目について記録されている。そのうち大学生の平日について記録されたものから1時間以上の行動項目を取り上げ、それ以外は「その他」としてまとめ直したのがTable 1である。なお、表中の数字の小数点以下は分で表す。

Table 1. Time use by whole students in Japan, weekday, 1995 (Unit: hours)

N=465

items	average	note	standard deviation
sleeping	7.22		1.48
other necessities	2.34	eating, personal care, rest	
job	1.12		2.13
study	4.50	lecture, club, outside work	0.20
household	0.35		1.06
going to university	1.48	including time to go job	1.25
watching the TV	2.10		1.56
other free time	3.09		
others	0.22		
total	24.02		

NHK 放送文化研究所

Table 1の標準偏差は、生活行動のばらつきを示し、ばらつきが大きいものは大学生間に行動の差が大きい行動である。ただし標準偏差は平均値が小さいと小さく出るので、平均値が大きく異なる項目間の比較をするには、目安として変動率を用いることが多い。変動率をTable 2に示す。変動率が小さい(学生間の差が少ない)家事を除き、また学業はTable 1の備考にあるように内容が多岐にわたって把握しにくいので除いた。すなわち以降の検討項目は、睡眠、仕事(アルバイト)、通学、テレビの4行動とする。

2. 2. アンケート調査

本学生生活情報学科の1年生を対象とし、平成7年10月の平日4日間の生活行動項目別に記録させた。調査対象者135名、有効回答数134票であった。

Table 2. Coefficient of standard deviation (Unit: %)

item	CSD
sleeping	20.5
job	190.2
study	71.1
household	3.0
going to univ.	94.0
watching TV	74.3

3. 結果

上記の4項目について、単純集計した結果をTable 3に示す。Table 3をTable 1と比較すると次のことがわかる。

Table 3. Simple total (Unit: hours)

item	average	standard deviation
job	2.00	1.85
going to univ.	1.57	1.24
sleeping	6.34	1.00
watching TV	1.41	1.21

イ. 平均時間では、全国大学生に比べ、本学学生の方が、仕事、通学の時間が長く、テレビ、睡眠時間が短い結果となった。

ロ. 標準偏差では、本学学生は仕事が1番大きく、睡眠が1番小さかった。すなわち自由行動である仕事は個人差が大きく、必需行動である睡眠時間は個人差が小さい結果となった。これはアルバイトをする者、しない者の時間差が大きいことを示す。これを全国大学生と比べると、本学学生の標準偏差は、全国大学生に比べていずれも小さい。その中でも通学はほとんど変わらないが、睡眠はもっとも小さく68%であった。

4. 解析

4. 1. 3段階分類に対する差の検定

次の基準を設けて、各項目を「多い」、「中間」、「少ない」の3段階に分類した。データを降順に並べ替え、上位から2割以上の時間を「多い」、下位から2割以下の時間を「少ない」、残りの6割を「中間」とした。ただし、仕事については0時間のデータ数が2割を越えるため、0時間を「少ない」とし、0を越えるものを「中間」とした。

この3段階により他の項目の時間がどのように変わるかを求め、Table 4を得た。Table 4の行方向に3段階を、列方向に行動項目を記し、各段階の平均時間を表した。

Table 4. Average time by classified hours (Unit: hours)

item		job	going to univ.	sleeping	watching TV
total	classified hr.	2.00	1.57	6.34	1.41
job	less	0.00	2.03	6.48	1.46
	moderate	2.00	1.55	6.37	1.40
	more	4.50	1.55	6.10	1.44
going to university	less	1.36	0.13	7.02	1.44
	moderate	2.10	1.44	6.36	1.43
	more	3.46	3.46	6.15	1.37
sleeping	less	* [3.17	2.11	4.49	1.49
	moderate	1.53	** [2.06	6.31	1.37
	more	1.35	** [1.16	7.52	1.55
watching the TV	less	2.37	1.32	6.27	0.09
	moderate	1.52	2.06	6.35	1.26
	more	2.05	1.45	6.38	3.28

** significant in 0.01

* significant in 0.05

no mark not significant

段階間の平均時間の差を検定したところ、通学－睡眠と、仕事－睡眠の間に、行列とも危険率 0.01 で有意な差がみられた。それ以外には有意な差がみられなかった。

有意な差がみられた 2 組について Table 4 から考察すると、仕事時間と通学時間が長くなると、いずれも睡眠が削られることがわかる。すなわち本学学生は睡眠時間を削ることにより、仕事をしているといえる。

項目の中でテレビ時間だけは、他の項目との関係が全く現れなかったの、これを次に調べる。

4. 2. テレビ時間と他の項目との関係

前述のようにテレビを観ている時間が他の項目との関連を示さなかったの、奇異に感じ、他の 3 項目を同時に考えるならば、テレビ時間と何らかの関係がみられるのではないかと考えた。そこでテレビ時間を目的変数とし、他の 3 項目(仕事, 睡眠, 通学)を説明変数とする一次式を想定し、これを数量化 2 類により求め、Table 5 を得た。

Table 5. Contribution of three variables to watching TV (Unit: range)

テレビ時間	job	going to university	sleeping
more－moderate	0.2078	0.3070	0.0791
moderate－less	0.1202	0.1876	0.0841
more－less	0.1600	0.2747	0.3304

3 個の説明変数によりテレビ時間を説明できるかどうかは、数量化 2 類では説明変数から推定される目的変数の的中率で判断される。推定の計算は、目的変数(テレビ時間)の「多い－中間」「中間－少ない」「多い－少ない」の 3 種類の組み合わせについて行われた。その結果、それぞれの種類の的中率は 58.5%, 52.8, 59.1% を得た。この推定が各組み合わせを有意に区別したかを分散分析により判定したところ、それぞれの種類は危険率 5%, 1%, 1% で有意であった。例えば、テレビを観る時間が多い－少ないの区別は、仕事, 睡眠, 通学を同時に考えると、この 3 項目で 59.1% の学生は推定でき、この区別は危険率 1% で有意であると言える。このようにテレビ時間は、他の 3 項目を独立して考えると関連がみられなかったが、同時に考えると明確な関連があることがわかった。

これら 3 項目の寄与率をレンジにより示したのが Table 5 である。レンジすなわちテレビ時間に対する寄与は、列方向を通してみると通学がもっとも高かった。これは通学時間が長いとテレビを見る時間が短くなる(Table 4)ことを意味している。ただし最大の寄与率を示すのは、多い－少ない(3 行目)の睡眠であった。

4. 3. 仕事時間と睡眠, 通学との関係

4. 1. 節で仕事, 通学, 睡眠の間に有意な関係があることを知った。4. 1. 節では 3 段階の分類値を用いて相互の関係を求めたが、本節では個人の数値を用いてもこの関係が成立するか、成立すればどのような関係かを、単回帰を用いて求める。結果は Table 6 に示す。

Table 6. Relation among jobs, going to university and sleeping

x	y	correlation coefficient	regression equation	ratio of regression	significant difference
job	going to univ.	-0.06	$y = -0.038x + 2.034$	0.422	none
job	sleeping	-0.23	$y = -0.128x + 6.837$	7.792	significance on 0.01
going to univ.	sleeping	-0.27	$y = -0.214x + 7.000$	10.076	significance on 0.01

仕事と通学には関連がみられないが、睡眠は仕事や通学の時間が増えるといずれの場合も削られることがわかった。

5. 結論

本学情報学科1年生の平日における生活時間を調べ、仕事(アルバイト)時間、通学時間、睡眠時間、テレビ時間の4項目について検討し、次の結果を得た。

(1)平均時間は、全国大学生に比べて、仕事・通学が長く、テレビ・睡眠が短かった。標準偏差は、通学が全国並で、他は小さかった。小さいとは、学生間に行動の差が少ないことを意味する。

(2)仕事、通学、睡眠、テレビの4項目をそれぞれの時間が多い、中間、少ないの3段階に分類し、各分類に属するものの他の項目の平均時間を求め4項目の間の関係を調べた。その結果、仕事と通学の時間が長いものは、いずれも睡眠の時間を削っていることがわかった。一方、仕事は通学との間には、有意な関係がみられなかった。

(3)テレビ時間は他の3項目と個々の関連が見られなかったが、3項目を説明変数とする一次式により関連を見いだすことができた。テレビを観る時間に影響が大きいのは、通学時間であった。

(4)上記(2)の関係を、分類値ではなく、個々のデータを用いて単回帰を実施し、同様の関係が求められた。

6 参考文献

- 1) NHK 放送文化研究所, データブック, 国民生活時間調査 1995, 日本放送出版協会, 東京, p.93 (1996)